

手賀沼が海だったころ

SNS 時代の情報発信と当会



1. SNS の功罪に思う

SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）はデジタル・ネットワーク社会にあって情報伝達・収集のツールとして、当たり前のような存在になっています。その一方で、SNSを通じた誹謗中傷や偽情報の流布などマイナス面もあります。情報が個人のレベルで瞬間的に、しかも世界に向けて発信できるのに、その情報が正しいかどうか判定されることなく、皆に伝わってしまう側面があります。

SNSは詐欺の温床といわれることもあり、実際ある大学では、警察署よりSNSを用いた投資詐欺に関する注意喚起があったとして、「ちょっと待った！ その投資！」と十分に注意するようにとの学生への通知がありました。

SNSで受け取った情報が正しいかどうかを受け手が判断するといつても中々難しいです。能登半島地震の際には、偽情報のSNS拡散が大量にありました。

SNSは情報が氾濫している、なかなか欲しい情報を得ることができない問題があります。あふれた情報には間違ったものも多いです。

それでもSNSの手軽さ、情報発信、取得の容易さから、多くの人が使っているのですから無視もできません。

2. 松ヶ崎城や当会は世の中でどれだけ知られているか

では松ヶ崎城や当会について、SNSの話題など含め世の中の人からどれだけ知られているのでしょうか。



<松ヶ崎城跡物見台にて>

2025年10月初旬時点では柏市の松ヶ崎城のX（旧Twitter）での話題は直近で9月に3件あり、いずれも松ヶ崎城跡に行っ

たとか、簡単な城跡の説明をしてくれているものです。当会はXはしていませんが、Facebookはあり、イベントの告知などの記事を時々あげています。

そのフォロワー数は300人以上で、記事をアップすると多くはないですが反応はいつもあります。また地域別でも千葉県東葛地域からのアクセスが殆どですが、神奈川県などからも閲覧があります。

YouTubeにも当会の動画を10年ほど前からあげていますが、一番再生数の多いもので6年間で5万回というものがある反面、少ないものは同様な期間で100回程度のものもあります。一方松ヶ崎城跡の紹介動画は当会作成のものだけでなく、河津桜関係の個人の方の動画がいくつもあります。少なくとも松ヶ崎城跡は結構知名度があるのでしょうか。

ネットではありませんが、当会の会誌『水辺の城』の所蔵図書館をみると、国会図書館や県内の図書館以外に東京の大学の図

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報

2025年10月21日

第53号

書館もあります。

また日外アソシエーツという会社の統計で地方史研究誌の一覧がありますが、全国で1,615あり、関東は400と25%をしめるのですが、関東で多いのは東京都110で千葉県の75、神奈川県の73と続きます。その千葉県の詳細をみると、博物館や県、市の発行物、松戸史談会、八千代市郷土歴史研究会、船橋市史談会といった昔からある地域史の団体の会誌に混ざって当会の『水辺の城』も載っています。また柏市では『かしわの歴史柏市史研究』があります。

まだ会誌としても当会のものは発展途上だと思いますが、世の中からは認知され来たようです。

3. 情報発信の曲がり角の時期?

さて、今までのイベント告知その他情報発信のやり方をふり返りますと、チラシを作り公共施設に置いてもらう、地域紙に記事にしてもらうといった昔ながらの方法と、柏市民公益活動情報サイト「かしわん、ぼっ?」のようなインターネットサイトに情報掲載してもらうという方法をとつてきました。実は他にも当会の告知をのせてくれるような情報サイトや紙媒体はあったのですが、やめられたのか、最近見かけないものもあります。個人のブログなども同様です。

SNSのような短い言葉

の発信がはやり、長文のブログや地味な情報サイト等は廃れたのでしょうか。

ネットでは柏市の情報サイトや新聞社のサイトなどはなくならないでしょうかから、そういう所を頼っていくしかないようです。



<当会イベントの一コマ>

勿論情報発信の前に活動の実績を積むのが第一で、当面地道に従来通りの情報発信を広範囲に続けるのが良いように思われます。

(文：編集部、写真：染谷竹進)

今年7月、松ヶ崎城跡にヤマユリが咲きました

一時は7月になると松ヶ崎城跡の方々に咲き乱れていたヤマユリですが、最近咲かなくなったと思っていたところ、今年はまた奇麗に咲きました。豪華で華麗なヤマユリ。これからも、城跡に大輪の花を咲かせてくれることを期待します。



(文：編集部、写真：荒井辰男)



柏飛行場と戦争遺跡（中編）

森 伸之

（2）柏飛行場に駐屯していた人々

柏飛行場に駐屯していた部隊の概史は前に述べた通りであるが、さらに部隊の要員構成やその中の人々の関係性といったことについて述べることにしたい。

終戦当時の柏飛行場の組織をみると陸軍航空総軍の下に第一航空軍があり、その下に第一〇飛行師団（天翔師団、師団長：近藤兼利中将）があったが、その第一〇飛行師団の配下の飛行第七〇戦隊と第三飛行場大隊が柏飛行場の駐屯部隊であった。また柏飛行場に隣接して立川陸軍航空廠柏分廠があった。

戦隊と飛行場大隊で柏飛行場が成り立っている構造は以前からである。戦隊は戦闘などに従事する空中部隊であり、さらに配下に飛行第七〇戦隊では3個中隊（飛行隊）と整備隊があった。そもそも戦隊という空中部隊と器材・燃料補給、飛行場の維持管理、警

備などを行う飛行場大隊という地上部隊は、昭和13年（1938）以前は飛行連隊として一体であった。それが空地分離により分かれたものである。

終戦時の飛行第七〇戦隊の人員数は記録が見当たらなかったが、その前の飛行第一戦隊については昭和18年（1943）11月からフィリピンへ捷号作戦で異動する前の昭和19年（1944）9月まで柏飛行場駐屯中の人員は約400人であった（注3）。以前当会が行った座談会で戦時中飛行第一戦隊に所属された整備隊の元大尉黒瀬純造氏によれば、総員400人のうち将校・下士官の空中勤務者は40人ほど、整備は整備隊長のほか、各中隊に対応して整備班があり、一班50人程はいたという。戦隊には本部要員もあり、衛生部の古井清彦軍医（大阪医大卒）たちもいた。

第三飛行場大隊は整備中隊と警備中隊からなるが昭和20年（1945）5月時

点で合計412人の陣容であった。うち兵科の兵は332人で詳しい配置は分からないが、整備担当の者が多かったと思われる。

柏分廠の終戦時の人員数も不明であるが、昭和13年（1938）の編制の著手順区分表をみると将校・下士官・技師・技手あわせて17人（注4）で他に実際の飛行機の修理などにあたる工員、雇員が100人規模ていたと思われる。

なお柏の戦隊の兵員は将校から兵まで兵舎に起居し、少尉以上は全部個室を与えてもらい、当番兵が付いたという。

飛行第一戦隊は昭和18年（1943）11月に満洲ジャムスから柏飛行場に来たが、その頃について黒瀬純造元大尉は以下のように語っている。

「柏の飛行場で隼という飛行機で訓練しまして、それが終わって途中で、また雁の巣の飛行場行きました、九州です。B29が来るというので行けというこ

とで、雁の巣の飛行場行つてしばらく待機していましたけれども、来そうにないということでまた柏に帰つてきました。半年もしないうちにまた機種改正、どんどん新しい飛行機できました、みんな中島飛行機の戦闘機ですけれど。私の部隊は戦闘部隊で、単座飛行機です。一人きりっしゃ乗れませんから。それで四式戦疾風というのに、最後変えたんです。それで四式戦に乗って、これはまた、潤滑油、オイルがよく漏れましてね。故障が多い飛行機だったんですけども、馬力は疾風のほうが2倍くらいありましたから、すごい、1,800馬力ぐらいありましたから、一つのエンジン。

それで訓練しまして、その中にここに写真一つありますけれど、私の親友だった大石という男が、薄暮飛行やってるときに墜落して殉職しました。それが今地図がありましたね、飛行場の地図。この滑走路、こっち（北へ）に向けて離陸したんです。ここにちょっと小高いところがありまして、その地面に飛行機が激突したわけです。それでバーンと真っ赤になって大き

な音がしましたから、これは事故だって、すぐ車で駆けつけたんです。私責任者で行きましてね。そうしたら、民家の手前に突っ込んで、飛行機逆さまになってるんですけど、エンジン、プロペラ無いんです。で行ったらエンジンはこっち、プロペラはこっち。それで民家は異常ないのかと思ったら、民家に穴があいているんです、スボッと。雨戸が。中は夫婦で、老夫婦2人暮らしてた。そこに突っ込んで、飛行機は突っ込まなかっただけれど、ラジエーターが突っ込んでやった。それで入ったら天井からオイルがツブツブツブ漏れてまして（以下略）」

この昭和18年(1943)12月26日の事故で、民家の2人は無事であったが、操縦者の大石四郎少尉は亡くなるなど、訓練中の事故はいくつかあったという。

隼から疾風への機種変更、厳しい訓練での事故もあったが、休日には豊四季から野田に外出することもあったとのことである。

また幹部候補生で機関工手であった整備隊の藤木泰夫氏は以下のように語っている。

「僕の場合は、昭和17年に新潟で徴兵検査受けましたら、甲種合格になってお尻を叩かれたんですけど、そのときに『何科がいいか』といわれたんで、『航空隊がいい』。『なぜか』っていうんで、『歩兵だと歩いて敵の陣地に行くんだけど、航空隊に入れば飛行機に乗って攻められるから航空隊がいい』って言ったら、『よし』ということでまたお尻叩かれて、それで2ヶ月くらいしたら、航空隊に入る通知が来て。それで早稻田を出ていたので幹部候補生になって、一番最初は仙台の教育隊に行って半年、教育を受けたんです。ところが飛行機に乗れるつもりで仙台の部隊に入ったんですけど、飛行機に乗るんじゃなくてエンジンの方だとうんとがっかりしちゃって、おまけに大学で商科の方だから、スパンとか、ナットとか言ったって全然分からない。それで苦労して半年何とか過ごして、それから今度は三重県の加佐登でまた幹部候補生の教育受けて、それから明野飛行学校にしばらく行きまして、それから約1年の教育を終わりまして、どこへ配属されるか

なと思ったら、南方じゃなくて、柏の飛行場へ配属されました。

それで初めて19年の4月1日、一戦隊へ入隊したんです。入ったその日から、たまたまそれまで習っていた飛行機が、九七戦と、一式の隼、二式の鍾馗(しょうき)、三式の飛燕だけでしたんです。4月1日に入隊しましたら、飛行戦隊はその日から四式戦の疾風(はやて)になったんです。だから、前からいる方でも飛行機が変わったんで、僕と同じような立場でやったんです。だいぶ苦労しました。幹部候補生というのは、ほかの兵隊からは割にいじめられるわけで、今のいじめじゃないけれど、本当に幹部候補生はいじめられ通しで。

そのうち10月、夜に事務室に呼ばれまして、『藤木、南方に行くんだけれど行くか』といわれまして、『南方行くと怖いから行きたくない』なんていったら大変ですから、『はい、まいります』っていったら、その1週間あとに、10月8日、北海道から百式呑龍という爆撃機が15機柏の飛行場にやってきました。

それで、3人くらいずつ乗せられて、それでそのときに貰ったものがあるんですけど、一つは手榴弾が1個。これは敵をやっつけるためじゃなくて、自分が死ぬため。もう一つは鰹節、鰹節の大きいやつ。それから乾パンと金平糖が入った袋が3袋と、それからもう一つは、釣竿。それだけをもらって飛行機に乗って飛びました。飛んだのはいいけれど天気が悪くて、飛んだばかりの飛行機が1機は、これは絵にもありますけれど、鋸山の山腹にぶつかって、副官なんか全部投げられたそうです。僕らの飛行機も東京湾をぐるぐる回って浜松に一ぺん降りました。浜松で降りてお寺に泊って、浜松、九州、上海、台湾、で初めてフィリピンに行ってきました」

藤木氏はまた、上官ではあるが同年輩の杉少尉に飛行機の後部に乗せて貰って飛行し、上空から日傘をさして歩く女性など下界を見下ろして、爽快な思いをした体験も語っている。

なお黒瀬元大尉が語るところでは、柏にいた頃の戦隊長松村俊輔少佐は温厚な性格で、雁の巣飛行場に

防空のため進出した際も隊員と囲碁を楽しみ、笑っている写真が残されている。

飛行第一戦隊がフィリピンへ行った後の昭和19年(1944)10月捷号作戦で戦隊も松村少佐や春日井敏郎大尉など戦死者が相次ぎ、兵力が減耗して昭和20年(1945)2月には空中勤務者と整備隊の一部が台湾経由で内地に戻り、高萩で戦隊の回復に努めてい

るうちに終戦となった。

柏に終戦までとどまつた飛行第七〇戦隊は昭和20年(1945)2月16、17日の関東への大空襲に際し、2月17日の空中戦で河野涓水大尉が厚木上空で戦死したことは前述の通りであるが、さらに3月10日の東京大空襲など夜間空襲への対応が激しくなった。

そのため戦隊は専門の夜間戦闘隊となり、昼間は部屋に暗幕を張って暗くし、遮光眼鏡をかけて「ふくろう部隊」として訓練したという。同年6月頃には飛行機を飛行場周辺の林の中に分散したり、飛行場周辺に「たこ」足掩体を作って隠し、ベニヤ製の偽飛行機、おとり飛行機を設置するなどした(注5)。

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報

2025年10月21日

第53号

昭和20年(1945)初頭から柏飛行場はロケット戦闘機秋水の基地となる準備がされ、終戦間際の7月には飛行第七〇戦隊の操縦者が全員が交替で立川実験隊に秋水搭乗のための身体検査を行うなどしたが、8月20日に予定された秋水の

お披露目飛行もしないうち終戦を迎えたのであった。

(注3)「飛行第1戦隊」

JACAR(アジア歴史資料センター)

Ref.C12121155800、
南東方面航空部隊の兵力及編制資料 其の1(4分冊)(防衛省防衛研究所)

(注4)「陸軍平時編制、昭

和12年軍備改変要領中改正の件並昭和12年軍備改変要領中改正の件」

JACAR(アジア歴史資料センター)

Ref.CO1004408600、
密大日記 第1冊 昭和13年(防衛省防衛研究所)

(注5)坂戸篤行「渡洋防空作戦」『B29対陸軍戦闘機』(1973) 今日の話題社 p.294

【次号に続く】

お知らせ

猛暑の夏が去り、朝夕涼しくようやく秋らしくなってきました。皆様いかがお過ごしでしょうか。会報をお届けします。

<2025年度総会の結果について>

2025年4月27日(日)の総会において議案すべて承認されました

<10月26日当会主催講演会実施について>

後援：柏市教育委員会

日時：2025年10月26日(日) 14時より16時15分まで(開場13時45分)

場所：柏中央公民館 4F 集会室1・2・3

柏市柏5丁目8-12 教育福祉社会館内：柏駅東口から東へ徒歩10分

内容：「今、平和を考える 陸軍航空の展開と柏飛行場」 講師：森伸之

(講演のほか、写真展示などをおこないます)

参加費用：500円 (資料代他)



<会誌『水辺の城』第9号を発刊しました>

本年7月末に発刊し、国会図書館にも先日納本しました。現在発売中。

東京神田・神保町の六一書房でも販売して頂いています

<一般公開記念展 染谷大太郎の足跡—手賀村を築いた豪農— 開催中>

日時：2025年10月12日(日)～2026年1月25日(日)の日曜日のみ
10時から16時まで

場所：柏市鷺野谷24 染谷家住宅 前蔵ギャラリー

内容：明治期に活躍した第15代当主染谷大太郎氏の数々の貴重な私物を展示

手賀沼が海だったころ

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報 第53号 2025.10.21

編集・発行人：森 伸之

年会費2千円 振込先：千葉銀行 柏支店 普通 口座番号3461475